

Title	有肩石斧の諸問題
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.2/3 (1939. 11) ,p.297(483)- 328b(514b)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿繪六葉 占部博士古稀記念號
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19391100-0297

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

有肩石斧の諸問題

松 本 信 廣

一、有肩石斧とオーストロアジア語

西人により *Schaftzungenbeil*, *Schulterbeil*, *Hache à tenon*, *shouldered celt* 等呼ばれてをる石器は肩の窄まつた柄付きの痕迹ある石器で印度支那新石器時代の特色ある出土物であり、その分布は遠く西方、アッサム、印度中央山地東部、及び東は臺灣、比島、日本等に及んでをる。此石器は最初印度支那地方からのみ出土してゐたのに對し一八七五年に印度に於けるムンダ族の住地チョタナグプールに於て發見せられた事が報告せられるや、俄然學界に衝動を起し、*Sir A. P. Phayre* (註1) は之を以てモン・クメル語族が齎したものであると推定した。成程ムンダ族の住する *Orissa*, *Santal Parganas*, 又 *Allahabad* の上方三十哩の *Junna* に沿ふ *Kasan* 等に於て其後陸續同型石器が發見せられ、またムンダ族の言語が印度支那のモン・クメル語と同一語族に屬してをることが一方言語學者によつて提唱せられてゐるので、此考

古學的類似は益々此言語學的親縁を確證する一つの證據として信奉せられて來た。最近に於て此有肩石

斧とモン・クメル語族即ちオーストロアジア

語との關係を力説してをるのはウキンの Ro-

bert Heine-Geldern 博士である。氏はそのシ

ュミット博士の頌壽論文集 Festschrift, Pub-

lication d'hommage offerte au P. W. Schmidt,

1928 中に公けられた Ein Beitrag zur Ch-

ronologie des Neolithikums in Südostasien の

中に有肩石斧とオーストロアジア語族との分

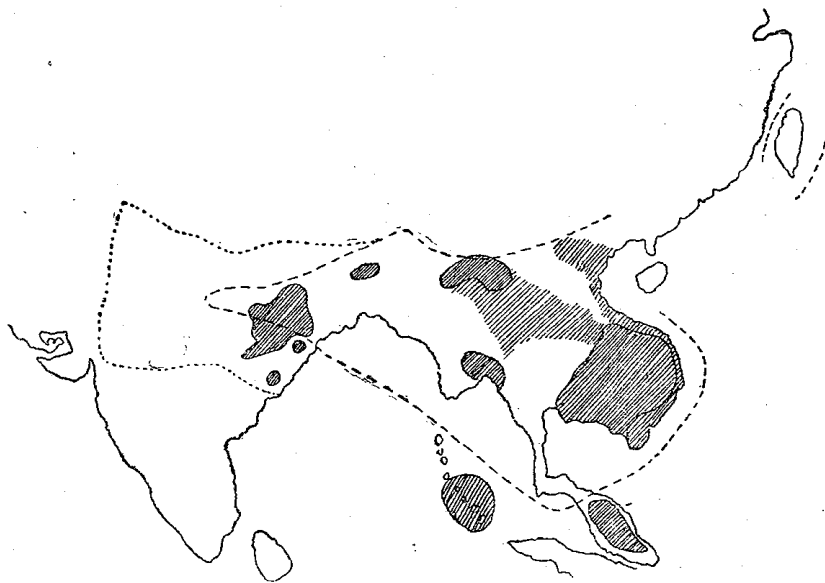
布圏を示した地圖を掲げ(第一圖参照) 次の如

く論じてをる。

有肩石斧とオーストロアジア語との分布圏

はたゞ現在の資料のみならず、歴史的の資料

及び種々なる存在痕跡から推察される古代分布圏に遡り考察すれば益々その關係緊密なるを見る。また之を反對の立場から證明するとチベット・ビルマ語族は歴史時代の初期恐らく新石器時代以來、アッサム、



第一圖 バイネ・ゲルデルン氏の有肩石斧及びオーストロアジア語分布圖

(Ein Beitrag zur chronologie des Neolithikums in Südostasien 所載の圖を改訂す)

----- は有肩石斧分布圏

..... は西方に於けるオーストロアジア語の痕跡ある地帯の界線

斜線はオーストロアジア語分布圏、輪廓をめぐらせる

圏内は全部オーストロアジア語の行はれることを示す。

然らざるは散在せる地域及び痕跡を示す地帯を指す。

西方ビルマの山地、イラワディ河の上流及び中流地方に占據してをり、此等の地方は有肩石斧の分布圏のごく僅小部を占めてをるに過ぎないが、此地帯を乗越して彼等はごく僅か、それも後期歴史時代に漸く溢出してをるに過ぎず、従つて彼等を有肩石斧の使用者と認めることが出来ない。またタイ語族も該地區の西方及び東方を占めず、その現在印度支那に於ける住地の最大部分を僅かに歴史時代、従つて既に金屬器時代に入り征服してをる故之も有肩石斧の使用者と認めることは出来ぬ。その外に該地區にたまたまオーストロアジア語族の如く他の先史文化が擴つたことを認容し得ない以上オーストロアジア語族を除いて外に有肩石斧の使用者はあり得ない。或民族集團と先史時代の器具形式との一致せること、かくの如く緊密確實なるは他に例を見ない。

有肩石斧の分布圏とオーストロアジア語族の現在又は過去に於ける分布圏とは左の四個所に於て一致しない。

一、印度に於てオーストロアジア語及びその痕跡は從來發見せられた有肩石斧の出土地より遙か西方に伸びてをる。之は恐らく有肩石斧を所有するオーストロアジア族は西進の途上同等の文化を有せる種族、恐らく尖頭形圓筒石斧を使用するドラヴィダ族と遭遇し、その文化を交換した爲であらう。

二、ニコバル島には未だ有肩石斧が發見せられてゐない。之は同島石器時代の調査が未だ知られてないからであらう。

三、マレイ半島の南半には有肩石斧が發見せられてゐない。前者と反し、同地は調査が行届いてゐない譯ではない。セマングやサカイの諸族は有肩石斧無きオーストロアジア族の初期の波より受けたか、或は後期の金屬期時代の波より受けたかどちらかである。支那史料によれば紀元二世紀頃に扶南がマレイ半島の征服をなしてをる。扶南の支配民族は其時既にクメル族であつたらしく、この征服の結果セマング、サカイはオーストロアジア語を借用したものであらう。

四、臺灣と日本とに有肩石斧が存するがオーストロアジア語族の分布圏が之と一致しない。恐らく臺灣に於ては比島から來たインドネシア語族の波がオーストロアジア語の先住民を追出したのかも知れぬ。

東京トシキンに於て有肩石斧とオーストロアジア語との分布一致せるや否やに就ては安南語の所屬如何によつて決定される。最初安南語をオーストロアジア語に入れた後、之をタイ語に數え、更にプシルスキ氏はその骨子をオーストロアジア系となしてをる。然し何れにしる安南語にオーストロアジア語起原の單語の多いことは曾つてオーストロアジア語の北東に擴れることを語つてをる。

有肩石斧の北方に對する分布圏の境界に就ては現在確實なことが云へぬ。アンダーソンの記述した西部雲南の騰越出土石斧中には二十三個の石斧中たつた僅か一個が有肩石斧に類してをるがその形三角形で柄の所はめだたぬ彎曲をなし殆ど有肩石斧と云へぬ。アンダーソンの敘述した石器は Sladen が採集

した百五十個の中の代表的のものなる故同地方に明白な有肩石斧の分布せざることは明かである。更に J. Coggin Brown が発表した同じ地帯で採集した石器の代表的石斧標本十二個中にもなく、また其後に発表した雲南旅行の採集物四十二個の石斧中に僅かに二個有肩石斧に似たものが発見せられるが之も圓味を帯び、印度支那中央安南山地、バナル、セダン、レンガオ等の住地に発見せられる貝殻形の斧型であり、メンギンは之を有肩石斧の古型となすものである。

要するに有肩石斧の分布圏は支那國境を雲南に少しく這入つて Wa, La, Palung などオーストロアジア語族の今日なほ居住する地帯のみを包含せるに過ぎず、此處が曾つてのオーストロアジア語族の北方境界であり、その北がタイ、又はチベット・ビルマ族の居住地であつたらう。廣西、廣東、福建、浙江等の南支那海岸地帯の石器時代に就ては現在の所未だ知見無く、此等の地方は曾つて安南人、又はその類族が紀元前三世紀まで居住し、また臺灣、日本に有肩石斧の発見せられる以上、此地方に於ても有肩石斧が存在すべき筈であり、此處が恐らくオーストロアジア民族の移動の出發點であらう。(註三)

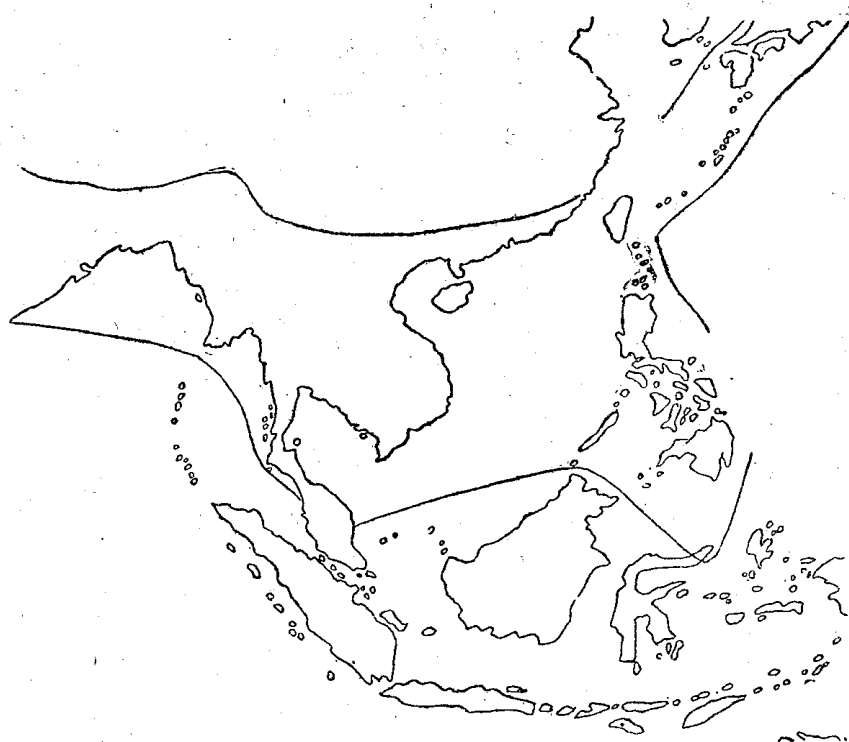
以上が本論文に述べられた著者の意見の大要であるが、氏は更に *Anthropus*, XXVII, 1932 に *Urheimat und frühest Wanderungen der Austronesier* なる論文を發表し、新出の資料により上記の考説に就ても若干の補訂が加へられてをる。

即ち南方に於てはマレイ半島の *Pahang* に於て発見せられた有肩石斧の一例を引用してをるが然し之

をもつて氏は單に一散點的分派に過ぎず、有肩石斧が半島の南に缺除すると云ふ事實を變改しないと云つてをる。然し氏の論文發表後 H. D. Collings は Report of an Archaeological Excavation in Kedah, Malay Peninsula (*Bulletin of the Raffles Museum, Singapore, Straits Settlements, Series B. No. 1, P. 5—16 May 1936*) に於て一九三五年上ペラクとシラムとの國境に近い Kedah の Gunung Baling を發掘した時、マレイ人が附近出土石器を賣りに來たのを購入したが中に二種の有肩石斧の存在することを圖示してをる。勿論此地點はハイネ氏の有肩石斧分布圏の界線とすれずれの所であり、氏の斷定に大した影響を及ぼさぬ。然し P. V. van Stein Callenfels 氏が同じ雜誌に紹介した柄つきの跡ある石斧はその形粗雜であるが Baling より稍南 Province Wellesley の Guak Kepah に於て發見されたものであり、氏は此種の石器がマレイ半島からインドネシアにかけて、發見せられ、外の地方では同型のものとしては蒙古の張家口で發見せられるものがある許りであると述べてをる (*An Excavation of three Kitchen Middens at Guak Kepah, Province Wellesley, Straits Settlements, ibid., P. 27—40*)。此石器は極めて粗雜な作りで有肩石斧と云ふことは出來ぬものであるが恐らく同じ様な土掘り目的に使用する石器であり兩者の間に何等かのつながりの存在することを推察せしむるものがある。未だ之をもつて磨製の精巧な有肩石斧の祖型であるとは斷定出來ぬが然し廣い意味でそれに先行するものの一であるとは考へ得る。之を有肩石斧の緣故のものとすればハイネ氏の界線はなほ南に移動せねばならず、種々の點に於て今後有

肩石斧の南方界線は一層研究の必要がある。

然し今日自分が此處に特に論じてみたいのは有肩石斧分布圏の北東限界である(第二圖参照)。ハイネ氏



第二圖 ハイネ・ゲルデルン氏の有肩石斧分布圖
(Urheimat und frühest Wanderungen der
Austronesier 所載)

—— 線内は有肩石斧分布圏

自身その論文の中に香港、朝鮮に於ける發見例を引き前著の分布圏を補訂してをる。即ち大山柏氏「神奈川縣下新磯村勝坂遺物包含地調査報告、東京、昭和二年一九二七」を引き、その分布が日本内地のみならず、北海道、北東朝鮮にまで及んでをることゝ敍及してをる。

そして日本に於て有肩石斧が發見され、之とオーストロアジア語及びその痕迹の分布圏が相一致することは最近の拙著「日本語とオーストロアジア語」及び之に對するシュミット師の批評(註四)により確證せられたと云ひ、また香港に於

ける出土は Dixon (註五) により、比島に於ける出土は Stein Callenfels (註六) により同氏の注意に上り、著者は先に北セレベス、ミナハッサに於て發見された有肩石斧は決して初め考へた様に除外例でなく之と同一系

統のものであると云ふこと、また臺灣、比島、ミナハッサに於ける有肩石斧の分布から推して比島、臺灣言語群がインドネシア語中一種特殊の形態を有することはオーストロアジア語の影響によつて説明なしうるのではないかと論じ、シュミット氏のインドネシア語中比島、臺灣語が最もオーストロアジア語に似てをると云ふ意見を紹介してをる。

ハイネ氏の擧げた例以外其後此北東アジア方面に於ける有肩石斧の發見例を此處に補足して見ると先づ著者は敘及してゐないが南滿、蒙古方面に此種の石器の分布することは顯著な事實である。

八幡一郎氏は朝陽縣宋家營子から採集された有肩石斧の破片をその第一次滿蒙學術調查研究團報告第六部第一編、「熱河省南部ノ先史時代遺跡及遺物」(十一頁)に圖示されてをる。之は粗面岩を扁平に砥磨して作り、上端及片側の一部を缺失し、現在長約七糎、刃幅八糎(推定)、上方基部幅七、二糎、厚さ〇、九糎のものである(第三圖三)。又同氏が敘及された如くリサン師も内蒙古の赤峯 Hata, 高家營子 Kao Kia. ying ze より採集した有肩石斧六個をその F. Licent, Les Collections Neolithiques du Musée Hoang ho-Pai ho de Tien Tsin, Tien Tsin 1932 中に圖示されてをる。^(註七)又東京帝國大學文學部考古學研究室蒐集品中に南滿洲復州長興島發見有肩石斧があり、之は赤褐色の斑糲岩を以て作られ、角張つた基部を有し、全形體は鋤の頭部に類似したものである。同じく同所々有旅順干家屯出土石斧も斑糲岩製で基部が一段細つてゐて掌握に便利に作られてをる。之は有肩石斧と云ふよりも有肩有段の混合した型式と見てよい

のではなからうか（考古圖編第五輯 圖版九、昭和六年四月）。

水野清一氏は「有肩石斧——南滿洲の石器——」（人類學雜誌四十八卷、五九五—五九八頁）の中に南滿洲土の有肩石斧を印度支那發見のものとなるとして之を北支那から滿鮮にかけて廣く分布する蛤刃丸形の石斧の一變種と見做される意見を發表されてをる。氏は印度支那出土のものは黄色の粘板岩で作つた扁平小形で往々片刃の鑿形石斧であるのに滿洲に於て見るのは普通に見る斑糲岩の蛤刃丸形の石斧に肩を作り出したものであることを理由とし、然し北支那や朝鮮ではまだ此形式のものは檢出されてゐないので之を南滿洲獨特の一形式と見られてをる。

氏はその集成圖を示され、その型を三つにわけ、

- 一、長手のもの、自然丸形である。
- 二、一と三の中間型、短い丸形をとる。
- 三、幅廣のもの、自然扁平である。

とし、一は最も古く、第三は最も進んだ型式であり、この石斧は遼東半島の先端をその本地とし極めて極限された地方に使用されたことが想像されると論せられてをる。その外熱河と朝鮮釜山から發見された一例づゝを擧げてをられるがその系統を異にしてをることを認められてをる。その熱河綏東出土のものは第三圖一に圖示したものである。予は此方面に就て極めて智識淺きものであるが南滿洲の出土有肩

石斧は有段石斧と純粹の有肩石斧との混合した例と見るべきで之と似たものは香港出土石斧に求むべきでは無いかと思ふ。

有肩石斧の日本に於ける發見は柄の明瞭なものを求めるとごく稀少である。大山公の前引著の中に左の五例を引いてをる。

- 一、常陸國信郡信太村出土、山本喜平氏藏、野中完一氏、瓶廼舍雜記、人雜第一四ノ一五七、
- 二、北海道室蘭繪鞆シクヅ見塚出土、大野延太郎氏、北海道旅行中の見聞記、人雜第一五ノ一六四
- 三、樺太出土、石田收藏氏、人雜第二二の二四七、
- 四、出土不明、羽柴雄輔氏、手斧の頭部に似たる石器に就き、人雜第七の七五、
- 五、陸奥國龜岡出土、佐藤傳藏氏、陸奥國龜岡第二回發掘報告、人雜第一一ノ一二四、

然し粗末な打製の所謂土搔きは分布極めて多い。

また本山考古室列品目録(昭和十年、二九頁)によると有肩石斧らしいものの刃部缺失せるものを掲げてをる(第三圖七)。柄部に穴あり、高さ八糎、幅六・八糎厚一糎、越前國坂井郡井伊村東十郷の彌生式遺跡出土の由である。小林行雄氏は大和唐古の遺跡より發見された綠泥片岩の磨製有肩石斧を「考古學」六卷三號(昭和十年三月、一一八頁)に本山考古室の前引標本と共に「彌生式遺跡出土の有肩石斧」として紹介されてをる(第三圖六)。また同じ號に三森定男氏が磨製有肩石斧の一例として薩摩國川邊郡知覽村西別府から

出た黒色にして精巧な磨製石斧を紹介されてをる（一一九頁）（第三圖八）。

その外有肩石斧が琉球からも一個出てをることは三宅宗悦氏の記事が見える（ドルメン、四卷六號一五四頁）。

また大山公は前引書中に朝鮮會寧附近出土土搔きとして多田純二氏採集藏の有柄石器を圖示されてをり、ハイネ氏は之も有肩石斧中に數えてをるが極めて粗末な打製石器であり、印度支那では安南出土品に之と似たものがある。小池奥吉氏「北鮮太古石器」（大正十三年再版）中には寫眞があり明瞭ならぬが有肩石斧と見るべきものが散見し、八木装三郎氏「朝鮮咸鏡北道石器考」（昭和十三年）中にも認められる。岡正雄氏は該地出土品は非常に大型である旨を語られたが八木氏の説明によると必ずしも全部然りとは見えぬので之を有肩石斧の部類中に入れて差支えあるまい。

此種の有肩石斧が臺灣に出土することは云ふまでもなく、臺北帝大土俗學研究室の宮本延人氏はその臺灣先史時代概説（人類學・先史學講座第十卷）の中に農具として使用せられたらしい鍬系統の石器を左の五種に別けてをる。

イ、打製石鍬

ロ、磨製石鍬A型（扁平一般型）

ハ、磨製石鍬B型（同上長大のもの）

ニ、磨製石鍬C型（有肩石鍬）

有肩石斧の諸問題（松本）

(四三)

三〇七

ホ、磨製石鍬D型（パツ型）

我國の縄紋土器に隨伴して出土する「土掘り」石器に似た分銅型の有肩打製石斧は（イ）に屬し、印度支那に發見せられる如き磨製有肩石斧は（ニ）に、ニュージーランドのパツに似た篋狀の中央縦に稜ある有肩石器は（ホ）に屬せしめられてをる。（ニ）に就て著者は左の如く述べてをる。

（ニ） 磨製石器C型

斧に切込のあるもので、極めて扁平、大きさもあまり長大なものなく小型のものは長さ十糎位のものもある。石質は砂岩で風化されて多くは表面白色を帯びてゐる。この型のものでスレート製は見ない。分布から云へば臺北附近を主とし、南は新竹州下に限られてゐる。大體に於て臺北平野を主とするものと考へられる。この石器は特に支那大陸に於て廣く見られるものである云々。

著者は之が支那大陸に廣く見られると云はれてをるが之は從來の知見から云へば寧ろ印度支那半島と云ふべきであらう。（ホ）のパツ型石鍬に就ては同教室の主任移川子之藏教授が史學料研究年報第一輯（昭和九年五月刊）の中に「『パツ』を繞る太平洋文化交渉問題と臺灣發見の類似石器に就て」と云ふ論文を掲載せられ、臺灣のパツ型石器は其淵源を推考するに元來手鍬に使用せられ、直接手に握るか又は短き柄を着けて開墾や農耕をしたものであらう。パツ型式のものが更に變化して薄きも厚きもあれば、又中央背筋に稜を生じ、或ひは兩肩を生じ、遂に純然たる臺灣特有の鍬型と成る。肩部が顯著で長方形又は半

橢圓形を呈し、安山岩又は粘板岩の鋸型石器は我國に在つては常陸及び陸奥から發見され、長いのは二七糎、小さいのは四糎位のものも存在する。支那、東南亞細亞、印度等からも發見せられる。支那では後に金屬時代に到つて石器使用は停止しても、貨布に其の倣を偲ばしめてゐる事は周知の通りである云と述べられてをる。教授はラウフェルなどの意見を承繼され、支那の貨幣が有肩石斧の形を傳へたものであるとの推定を其儘受入れられてをるらしい。然し此考へは予をして云はしむれば今一應検討を要するものの如くである。支那に有肩石斧の確實な出土例が知られて來たのは香港の發掘以後である。然も香港のものはポリネシアのものに似て有段有肩石斧であり、形式の上では寧ろ南滿洲出土のものと同絡し、直接臺灣のものに似てゐない。

支那本土より出でたる有肩石斧として支那學者の記述になるものには中國考古報告集之一、「城子崖」南京、一九三四所載のものを擧ぐる事が出来る。即ち、この山東省歷城縣龍山鎮遺蹟出土としてその書の七十五頁、圖版三十六の七、八に鏟類の一種として帶柄扁平式なるもの二個を擧げてをる。(第三圖四、五)之は柄が明白ではないが少しくその痕跡ある磨製有肩石斧であり、一は下部缺損してをるが他は下部完全で刃は片刃、稍凸形をなしてをる。大いさは明示してないが圖が二分の一大であるから大體前者が全長九・四糎、幅七・六糎、柄部幅六・六糎、厚一糎、後者長一三・六糎、幅七・四糎、柄部幅五・八糎、厚〇・八糎である。

殷虛よりも有肩石斧の出ることは李濟がその「殷虛銅器五種及其相關之問題」(慶祝蔡元培先生六十五歲論文集上、北平、一九三三)中に敘及してをる。彼は殷虛出土石斧の一に肩斧なる種類を挙げ、「似戚無齒、上端仄向內、如肩之於頸、對稱」と云ひ、十三圖の五をその例としてをる(第三圖二)。然し此圖に示せるものは骨製であり柄部が缺損してをり、その上部左より小孔が穿たれてをる。然し殷虛から有肩石斧の出土することは確實であり、李濟は殷虛文化の中この有肩石斧は水牛、稻、文身の如きものと共に南アジア文化の影響であらうと見てをる。

西湖博物館、吳越史地研究會編「杭州古蕩新石器時代遺址之試探報告」上海、一九三六は、杭州古蕩より出土した有肩石斧一個を圖示してをる(一六號)。(第四圖一)その説明によると「石鉞柄寬四・二、柄長五・五、身寬六・四、中長八・九、柄厚〇・八、身厚〇・三、千枚巖」とある。

また何天行編「杭縣良渚鎮之石器與黑陶」上海一九三七には良渚鎮出土の有肩石斧二個(第四圖四、五)を圖示してをる(第三圖版A B)。その説明として次の如く述べてをる。

A 石戚 長七吋(連柄)、刃長五吋四分、柄長三吋、孔厚五分、磨製。(第四圖五)

B 石戚 直長四吋四分、刃長五吋三分、柄長二吋、中厚五分、磨製。(第四圖四)

之は形甚だ長大で寫眞が鮮明を缺くがハイン氏は印度支那出土のもので、可成り粗末な柄付石斧も有肩石斧の部類に入れてをるから、此處に之を同じ系統に入れて差支えあるまい。

杭州西湖博物館藏品には昭和十三年六月に之を訪問した際（イ）有肩石斧の中極めて特色ある印度支那マサハイ出土品と比較すべきもの、及び（ロ）大きな打製の石鋏的の器具、及び（ハ）石劔類似の有柄にして稜ある石器を見た。（ロ）は大型で有肩石斧の部類には入れることは出来ぬが所謂前期的の遺品として注意すべきものである（第五圖一）。アンダーソンが張家口にて採取したものとしてその J. Gunnar Andersson, *Children of the Yellow Earth*, 1934, P. 330 に圖示してをる有柄の大型石器も矢張りかういふ前期的の類に屬するものであらう。ア氏は之をもつて新石器前期の遺品では無いかと見てをる。

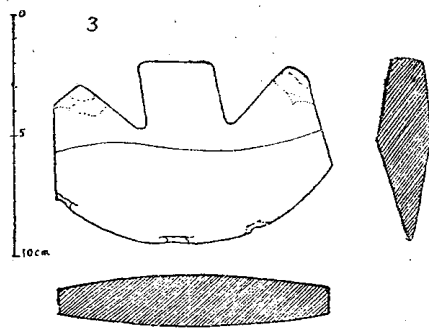
（ハ）は稜のある點が臺灣出土のバツ型石器と似てをるが少しく異形であり注意すべき遺品である（第五圖二）。

（イ）（第六圖一）と類似せるものを自分は杭州の骨董店に於て購入することを得た（第六圖二）。極めて裝飾的で、實用に供せられたとは考へられぬものであるが、コラニ女史は、佛領印度支那マサハイ洞出土肩上り石斧（第七圖三）を記載した時比較に供した資料の中に比島の *Tringian* 族の稻の穂をつむ爲めに使用する今日は鐵製の利器（第七圖一）及びエクアドルの古代墳墓出土青銅斧（第七圖二）に類似型のを舉げてをる。（M. Colani, *Haches et Bijoux, République de l'Equateur, Insulinde, Eurasie, B, E, F, E, O*, XXXV, 1935, Fasc, 2, P. 332.）

また湖州錢山漾出土のものには「吳越文化論叢」所收慎微之「湖州錢山漾石器之發現與中國文化之起

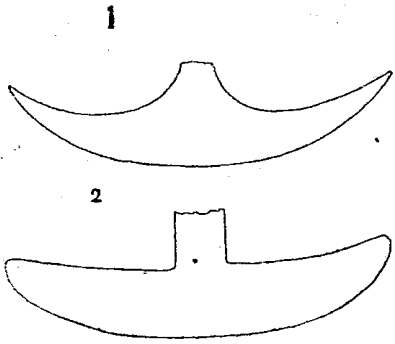
源」の中に粗雑な有柄石器(第四圖三)と貝殻様の肩の輪廓不明瞭な有肩石斧(第四圖二)とを圖示してをる。

前者は有肩石斧の部類に入れることは出来ないが後者は雲南出土ハイネ氏の所謂初期的有肩石斧と比較すべきものであらう。



圖

七



第

D. J. Finn 氏の Archaeological Finds on Lamma Island near Hong Kong, Part III (Ho S. Kong Naturalist, Vol. IV, No. 2 December, 1933.) に於て香港船遼洲の出土有肩石斧が the shoulder-stepped type に屬することに就てのハイネ・ゲルデルン氏の説に注意してをる。即ち彼はその出土石器の中二、三、四、六、十四の番號を與えられるものを有肩有段石斧と斷定してをる(第八圖六)。なほ香港出土石斧の代表的なものは Heanley, Hong Kong Celts (*Bulletin of the Geological Society of China*. Vol. VII. No. 3, 4. 1928.) Heanley and Shellhear, A Contribution to the Prehistory of Hong Kong and the New Territories (*Præhistorica Asiae Orientalis*, Hanoi, 1932.) にも見えてをる。^(註八)

要するに支那發見の有肩石斧は必ずしも印度支那出土品とそっくり酷似してをると云へず、肩の切込みなど明瞭な直角線をなしてゐない。従つて自分は支那を有肩石斧の分布圈に入れることはなほ幾分の

躊躇をなすものであるが上述した様にハイネ氏は頗る寛容な取扱ひをなし、随分有肩石斧の中に不明瞭なものも入れてをるのであり、また蒙古、南滿、朝鮮にも存する以上その中間地帯なる支那本土も分布圏の中に入れてよいと思ふ。

たゞ此場合北方支那に於ける發見例はごく稀れであり、中部、南部支那に多いことは注意して考えねばならぬ。此處に支那文化の北と南との差を考へ得るかも知れぬ。然しそれは兎に角ハイネ氏の有肩石斧分布圏の北方界線は、今後之を改訂して、更に北に及ぼすことが必要である。たゞオーストロアジア語は從來支那中原、蒙古、滿洲、朝鮮に痕跡が認められない。朝鮮方面に認めんとする論者の存在することは、岡正雄氏より伺つたがまだその人の意見の發表されたことを聞かぬ。従つて有肩石斧分布圏とオーストロアジア語分布圏とは北東部に於て大變くひちがふ結果となるのである。楊子江の下流南方に居住した越人を安南人の祖先又は類族となす説が通説であり、オルソー氏も之を支持し、歐米學者の之に従ふ者が多いが自分は此説の再検討を要することを先般岩波東洋思潮講座中「印度支那の文化」上の中に述べて置いた。その中之は更に改めて詳説して見る積りである。ハイネ氏の云ふ如く、中部、南部支那がオーストロアジア族の故郷であつたかも知れぬが之は今日なほ容易に斷定し得ぬ大問題である。言語の分布を考古學遺物の分布と關聯づける考へ方に對しては、自分は今の所未だ懷疑的である。

二 有肩石斧と布との關係

此有肩石斧と支那古代の貨幣との相似に注意したのは有名な支那學者ラクーペリーである。彼は *Terrien de Lacouperie, Catalogue of Chinese Coins from the VIIth Cent. B.C., to A.D.621. including the series in the British Museum.* Paris, 1892. P. 4. に於て周代の有銘通貨の第一として幣鏟 *Pi-teh'an*, or *Spade-Money* を記述し、幣鏟の形は有肩斧として知られ、南東アジアに特有な石器時代器具の遺存として特に興味がある。此有肩石斧は今日までの所ベグー、カンボヂア（トンレ、サブ）、中央印度（チュチア、ナグプル）にだけ發見せられたものであると述べてをる。The shape of the *Pi-teh'an* is peculiarly interesting as a survival of an implement of the Stone Age, known as the "shouldered celt," and proper to South-eastern Asia, which has hitherto been found only in Pegu, Cambodia (*Tonlé-Sap*), and Central India (*Chútia Nágpur*).

またベルトルド・ラウフェルは *Lauter, Jade, Chicago, 1912, P.73—79.* に於て此説を更に繼承發展せしめ、青銅器に於て石器の形式を傳へたものの一例として *spade-shaped celt* を挙げ、大要次の如く述べてをる。支那人は往古に於て物々交換を行ひ、その持てるものを持たざるものと現物交換をなした。次いで現物に換ゆるに道具の模型を鑄造し、之に一定の價值を刻して交換の具に供した。「錢」と云ふ字は

既に古き以前から貨幣の意味を持つてをるが詩經に於ては鍬の意味であり、説文も此語の前の意味を此語にかづけ、農具として定義してをる。鑿幣と云ふ名の本に周代に行はれた貨幣は鑿、即ちシャベルの形を示し、此形式の農具から發達したものであるかも知れぬ。テリアン・ド・ラクーペリーは、之を石器時代の器具の遺存として見、之を東南アジアに發見される有肩石斧と比較した。此同一視は決して完全なものでなく、一部分が正しいだけである。と云ふのは石斧の刃が凸面であるに對し、支那の鑿の方は凹面であると云ふ顯著な相違があるからである。之に似た型としては漢代の玉製の舞戚に求めることが出來やう。かういふ器具の祖原體に遡ると有肩石斧によく似た形を再建することが出來る。なほ漢代の青銅鉞の中には一層此種の石斧と似たものがある。

有肩石器の存在は中央印度のコーラ種族とその類似語を話す印度支那のモン・クメル族（南東アジア又はオーストロネシア種）の特色である。第八圖一、二、三は此種の石斧の三個をA・グリーンウエデルに従つて示したものである（一は中央印度チャタナグプール、二、三はビルマ出土）。一八七三年までこの形式の石器はペグーとマレイ半島にのみ出土した。その年に此型の二例が中央印度のチャタ、ナグプール *Chhōtā Nagpur* に於て發見せられ、V・ポール氏により記述せられた。その一は暗青の固き硅石であり、他は黒き火成岩である。ポールはその原料石はその發見せられた *Singhūm* 地方にのみ採掘せられうるものであり、またコーラ族の住地に屬してをることを指摘し得た。此二型のペグー出土のもの

同一なることは直ちに認められ、殊に比較言語學の結果の悦ぶべき確證を得たとしてF・S・フォルブズ氏は雙手を舉げて之を歓迎した。^(註十二)此種の發見は最近著しく増大した。ネトリンク Noeling はビルマでかゝる有肩石器を二個手に入れ、今日大英博物館にあり、グリユンウエデルにより前記の論文中に印度型と比較されてをる。P・O・ボディングはコラ、即ちムンダ族の一支派サンタルの地方からもより多くの資料を持ち歸り、たゞS・E・ピールの主張する此器具は鋏として使用せられたものであると云ふ説に對し反對してをる。その理由はもし果して然らば此形式の鐵鋏が此人種によつて使用せられてをるべきなるに、かゝる事實存せず、サンタル族の如きは杖の先に平たき鐵片を結びつけて根を掘り、地に小さき穴を穿つのみであると云ふのである。然しかゝる反對論は大して有力でなく永い歴史の間に於ける雜多な事件の影響を考慮に入れねばならぬ。恐らくコラ・モン種族は曾つて一體をなして東ヒマラヤの南山脈に沿ひ生息してゐたものであり、ベンガルやアッサムの地方にまで擴つてゐたものであらう。後に此集團が分解し、モンは南印度支那に向ひ移動し、ユラは南西、印度に向ひ移住したのであらう。サンタルの傳説によると彼等は曾つてガンジス河の兩岸に居住し、北東から出發して、漸次ガンジス河を遡り、遂にベナレスの附近に達し、河の北岸にゐたその主力が、河を横切り、南に向ひ、遂にチャタ・ナグプールの高原に達したのであると云はれてをる。従つてナガ地方が曾つてモン或はコラの未だ分離せざる集團の住地であり、此處に特色ある石斧を残し、之を模擬した鐵製器具を生み出すに至つたもの

と考へられる。コラ族の方は之を忠實に持ち続け、遂にその新住地に到達した際、之を漸次忘却し、近隣の耕作種族から鐵を輸入したのであらう。即ち有肩石斧は極めて太古のもので、然も極めて永く使用し続けられたものであり、青銅時代に於ても未だ使用せられてゐた。J・デニカーはカンボディアに於て青銅器と共に發見せられた有肩石斧をその *the Races of Man*, P. 364, New York, 1906 の中に圖示してをる(第八圖四)。

この有肩石斧の發見せられた全ての種族は曾つて鋤耕作を行ひ今日もなほ部分的に之を行つてをる。従つて此器具が此目的の爲使用した *mattock* であつたことは明かである。従つてその歴史の初まつて以來十分に發達した農業者であつた支那人が之を發明したとは思はれぬ。寧ろその南に之と隣りあつて生活してをつた鋤耕作者に相違ない。此事情が支那人が之を使用しなかつたので支那に有肩石斧の存在しない事實を説明するであらう。支那人が之を使用しなかつたからである。彼等は之を眞似て交易の目的に供する小青銅模型を製作した。それがまた儀式用の青銅又は玉の舞戚として用ひられたとしても、支那人自身が説く如く其舞踊の大多數が南の蠻の樂に淵源してをる事實を想起するならば大して不思議はない。舞踊が採用せられたとすれば、それに屬する附屬具も同時に採用せられたと見られるからである。即ち青銅の鋤型器具は支那人が東南の文化圏からその二大文化圏の未だ分離せざる以前に採用した數多の個物及び思想の一であり、この二つの文化領域の漸次なる融合が吾人が單に支那と呼ぶ文化を生成し

たものである云々。

以上のラウフェルの意見は博識ではあるが所々その先入觀念に捉はれて獨斷的な所がある。即ち支那民族は歴史の當初より發達せる農業者であり、鋤を使用しなかつたとか、また彼等は石器使用者でなく、支那に發見せられる石器は悉く他民族の遺物であるとか、支那民族は曾つて舞踊種族でなく、今日の支那人を見ても男子は踊りをなさぬ。然るにチベット人、蠻人等全ての東南アジア族は、舞踊が彼等民族固有のものであると斷じてをるが如き、誰が見ても誤まれる前程と見るべきで、其上に立脚した氏の學術的推論に思はぬ誤差を生み出すのも無理は無い。

然らば支那の古代の農具は、實證的に見て如何なるものであつたらうか。近代の支那農書などには、種々その形式を推定してをるが、此處にはまづ支那の新進考古學者の説に聞いてみよう。

「集刊」第二本第一分、北平一九三〇の中に徐中舒の「耒耜攷」なる論文が發表せられてをる。同氏は甲骨文や銅器の銘文に表はれたる耒字の象形を究め、耒の形が屈曲し、先端が二條に分岐せるものなることに注意し、武梁祠石刻に見ゆる神農の手に持つ農具と相異ならざることを推し、古代の錢幣の中、圓足布、方足布、尖足布は古への農具の模倣であり、何れも兩足を有してをる。空首布(第九圖三)と云はれるものは、兩足布(第九圖四)と違つて下端が一刃であり、かつ柄が函形をなし、首端に小孔を有し、兩足布の兩部が扁平をなしてをるのと相反してをるが、之は空首布が先でそれから兩足布に變化したので

なく、兩足布が先で空首布になつたものであらう。なせならば、甲骨銅器上の諸文字は悉く耒を兩刃ある農具として表はしてをる。恐らく古代人は古へ枝を用ひて地を掘り、後に樹枝に模倣して岐頭の耒を製作したものであらう。また製作上扁平の農具の方が柄が函形をなせる農具より鑄造し易かつたに相違ない。即ち最初兩足布が出来て次いで製作の繁雜な空首布が鑄作されるに至つたものであり、従つて空首布の方が後出である。一方耜の方も文字上から見ると木棒的農具であり、日本の正倉院藏する子日手辛鋤と類似せるものであり、木棒の先端に半圓又は磬形の金屬刃を嵌入したものであつたらしい。耒は古へ三晉の地に行はれてゐたことは同地帯に兩足布、空首布が分布してをる所から想像出来る。刀布の行はれてゐた燕齊の地も矢張り耒が使用せられてゐたらしい。耒は殷人が用ひてゐた農具であり、殷の滅亡後東方諸國に擴つたものであり、また耜の方は西方に用ひられてゐたものであり、東遷以後も汧渭の間に行はれてゐたものであらうと論じ、最後に後世耒耜の名稱が混淆し、耒耜が混じて一名となつた由來を想定し、またその耕作の方法、牛耕の起りし年代や耒耜の遺存を尋ねて終つてをる。

徐中舒の論文は文字學上より見て中々周密な勞作ではあるが殘念ながら獨斷的議論に煩らはされてをる。彼は支那に於ける原始農具の種類を勉めて簡單ならしめんとし、古文字上に表はれる耒と耜とをもつて全ての支那の農具を一律に律し去らうとしてをる。然しながら此考へ方は吾人の取らざる所である。支那古代の農具としてその外錢（鉞）或は鐔と呼ばれしものがある筈であり、ことに錢（鉞）が空首布

の起源となつたとは常識上考へられる所である。著者は之を耜と同一物なりと認め、管子海王篇に「耕者必有一耒、一耜、一鋤、」とある文句は雜亂であり、鋤と耜とは形式の異なるだけでもと一物であると斷じてをる。

また輕重乙に「一農之事、必有一耜、一鋤、一鎌、一鐮、一椎、一銓、然後成爲農」とあるのも耒と鋤とは、名がことなるだけでも同一物に過ぎぬのだと説いてをる。そして鋤は一名耜であり方言五をひき耜が燕之東北、朝鮮冽水の間で耒と云ひ、江淮南楚で耒と云ひ宋魏で鐮と云ひ、東齊で耒と云ふ例を擧げてをる。然しながら方言に於て或名稱が混同して他地方に於て他物を指して用ひられることは屢々見る例であり、之をもつて鋤と耜とが本來同一物であつた證據にはならぬ。自分の考へでは錢(鋤)又は耒耜と別種の農耕具があり、之が原始時代に於て農耕具として相當重要な役割を演じてゐたものと考へる。

耒耜が耒耜と殊なる農具であることは江上波夫氏の研究「古代南支那の田器、耒(耜)に就て」が「歴史學研究」(八卷六號、昭和十三年六月)に公けにされてをる。氏は周禮考工記の序に「粵之無耒耜也、非無耒耜也、夫人而能無耒耜也」とあるを引き、耒耜は粵地の特産であり、之が青銅製品で、一に耒とも云はれ、茶蓼の如き草を薙するものであること、之が釋名に「耒亦鋤類、田器也、耒迫也、迫地去草也」とある如く地表に接觸して草を除去する鋤の類であり、地を深く掘り起す耒又は犁の如き深耕の農具では無いであらうと論じ、耒は柄が短く之を用ふる人は身を屈しなければならなかつた。耒耜は鋤の類であり鋤に似

たものとされてをるが鋤は釋名に「鋤助也、去穢助_ニ苗長_ニ也、齊人謂_ニ其柄_ニ曰_レ檀、檀然_ニ正直、頭曰_レ鶴、似_ニ鶴頭_ニ也」とある如く用途に於ては鍤鑿と同じく雜草を除去するものであり、その柄は説文解字に見える鋤の古字鉏の解釋、立つて草を除去する器具といふのに従へば長かつたものに相違ない。鋤頭は鶴の頭に似てをるとすれば〇の如き形をなしてゐたものであらう。鍤鑿は之に似て所謂地に迫つて草を去る器具、即ち地表に淺く接觸して草を除去する短柄の器具であつたとすれば比較的幅廣き刃部を有し〇の如き形をなしてゐたものであらうと見、要するに古代支那に於ける鍤（鑿）は廣さ六寸の〇形をなす青銅製或は鐵製の薄手な鋤頭に一尺の柄を附したものと推定してをる。粵の鍤なるものも之と同じものであることは、雲南又は東京より出土した鋤頭から推測することが出來ると斷じ、最後に之に似た半磨製石器が林西、赤峯等の新石器時代の遺蹟より出づることに注意してをる。江上氏の所論は鍤（鑿）が耒耜と異なる農具であることを明かにしてをる。たゞ少しく自分の考へを述べることを許していただければ鍤が鋤の屬であると云ふ事から鍤の形が鋤の形〇に似た橢圓〇と見る以外、他の見方例へば刃が地と接する面の大い通説の如く△の形等に見ることも可能では無いかと云ふ疑ひである。

鍤が草を披去する農具であつた如く、錢（銚）も亦同種の農具であつた。詩の周頌臣工に「命_ニ我衆人_ニ序_ニ乃_レ錢鍤_ニ」とあり、毛傳に「錢銚」と解してをる。

世本に垂作_レ銚と云ひ漢宋衷の注に銚刈也とある。刈といふ以上その用器の刃は幅廣のものであつた

と認むべきである。毛詩正義には以上の文句を引き「世本云垂作銚、宋仲子注云銚刈也、然則銚刈物之器也」と云つてをる。

戦國策卷三秦策に「無把銚推耨之勞、而有積粟之實」とあり、宋鮑彪の註に「銚芸苗器、耨耨器」と云つてをる。芸は耘と同じく「くさきる」ことを意味してをるから、銚が草を除する器であることは推定出来る。また莊子外物篇に「春雨日時、草木怒生、銚鐸於是乎始修」とあり、註に銚に對し「七遙反、削也、能有所穿削也」鐸に對し「乃豆反、似鋤」とある。銚と云ふ田器が穿削する器であることに注意せられる。

更に韓非子八説に「古者寡事而備簡、模陋而不盡、故有珧銚而推車者」とあり、元河狝註に「珧音堯辱屬、銚音挑、耨剗削之器也」とある。即ち銚と呼ばれし農具は耨くさきり、削り、平らにする器具である。削り平りにする器の刃の地に接する面が平らなものであることは疑ひない。

此銚に最も似かよれる農具は鏟である。倉頡篇に「鏟削平也文選註一切經音義」とあり、魏李登の聲類には「剗平

之也方刃施柄者也十住毗沙論音義、成具光明定意經音義、瑠璃王經音義、善見律音義並引首句」とある。之によれば鏟又は剗といふ農具は銚同様削

り平らにする目的のもので、刃が方形で柄のあるものだと云ふ。後魏、賈思勰の齊民要術、耕田には何承天の纂文を引いて「纂文曰養苗之道鋤不如耨、耨不如鏟、鏟柄長二赤刃廣二寸以剗地除草」と云つてをる。即ち鏟は柄が二尺で刃の廣さが二寸であり、もつて地を削り平らにする器であつたのであ

る。かくて明徐光啓、農政全書に錢を解して「殆與鏟同」と云ひ上述の纂文を引き「此鏟之體用卽與錢同」と述べてをるのは充分な理由を持つてをる。

以上の引例から錢（銚）及び鏟なる農具が古代に存し、鏟の方は方形の刃を持つた柄のある農具で草を除去するに用ひられたものであり、銚も目的が之と同じなので之に似た農具であつたと推定出来る。

徐中舒氏が銚を耒とを全然同一視し兩刃なりとするのには自分は賛成出来ない。從來の古錢學者の意見も亦自分と同じである。李佐賢の「古泉滙」元集卷十に空首布を論じ「布形類鏟、故俗呼三鏟布」と云ひ、入田整三氏は其「刀布の形式とその起原」（考古學雜誌十五卷大正十四年）に於て、空首布を布貨中最初のものとし、原型は鍬斧より出づるとし支那將來の「錢」と云へる鐵製鍬を圖示し（第八圖五）、空首布は之より來りしものならんと推し、更に鏰幣と稱するもの（第八圖七）をあげ、鏰と稱する銅製器具を圖示し、之も農具であり鏰幣は之より淵源し空首布に種々影響したるならんかと論じてをる。後藤守一氏も考古學講座所載「上古の工藝」の中に於て古錢の中の「布」は鋤頭より出たものであることを認め、塚本靖氏「支那古錢形狀の起源に就て」（考古學雜誌十五卷八號）に於ても布を古代の鋤の頭であると見、その首の所に柄を挿し込んで使用したものであると見てをる。（註十二）かういふ意見に對して反對する論者もあり、例へば三上香哉氏は考古學講座所載「貨幣」の中に空首布は農具を模したものでなく、支那は古代に於て大農制であり、こんな子供だましの如き農具が行はれたとは考へられぬと云ふ、また刃部の尖端

に刃先がついてをるのが農具田器に類例を見ぬ、鋤や鍬には刃先は不必要だと論じてをる。然し古代支那が大農制であつたといふ確實な證據なく、また之が草をとる具として用ひられたとすれば尖端に刃があつてよい筈である。三上氏の反對論は遺憾ながらなほ疑ひを残してをる。たゞ、入田氏の例示された様な「錢」なり「鐻」なりの器具が果して古代に於ける該名稱のものとして一致するものなるか否やに若干の疑問が存する譯である。然し之とても上述した様な古文献の例證をもつてすれば可成納得出来るものである。たゞかゝる古文献の年代が多く漢六朝以後のものであり、周戰國時代と極めて年代的距離あるものであるが、かゝる器具類は得て邊境地帯、異民族の間などに古態を止めて保存されをるものであり、漢六朝の所傳に信用を置いて大して誤りは無いであらう。

問題はラクウペリーの如く、またラウフェルの如く、かゝる古代の金屬農具が直接有肩石斧と關聯あるものと認めてよいかと云ふ問題である。

香港船遼洲の出土青銅器の中に方形にして柄部の僅かに認められるものが存する。一は同地特有の有段有肩の石斧から轉化したものらしく厚味を帯びたものであり(第九圖二)、今一は兩側の縁線が柄の下から反り返り、シャベル状をなしてをりもと木部に嵌込みしことを想起せしむるものである(第九圖一)。

何れも香港に發見せられる有段有肩の石斧が青銅斧に發達したものであることを推察せしめる。自分は發掘者フィン氏から此出土物を見せて貰つた時、之が恐らく貨幣類似のものでは無いかと云ふことを疑

つたが、思ふに古代支那に存在した有肩石斧が青銅斧に移行したと推定すれば空首布系統の鍬型金屬器を生み出したことを想像出来る。然し現在の所支那から發見せられる有肩石斧は明瞭に布の形をなせるもの少く將來發掘によつて今少し明瞭な布形をなせる有肩石斧の出土せざる限り

有肩石斧 → 鍬型金屬器 → 空首布

と云ふ過程を確實なりと斷言すること出来ない。また有肩石斧の中には柄との着裝法に於て刃が柄と平行になる斧式のものもあり、全ての有肩石斧が鍬型金屬器の祖型であるとも考へられぬ。然したゞ今の所多くの金屬器が過去に於て石器の祖型を有する所から古代支那に於ける鍬型金屬器も相似た石器より淵源せるものなるべく、現在發見せられる有肩石斧はかゝる祖型の縁類ではないかと云ふ想像がたてられ得るのみである。かゝる推定が確かめられるためには今後なほ盛んに中部支那の發掘が行はるべき必要がある。中部支那がかゝる器具の盛行して地方であることを想像せしむる一つの理由として「古泉滙」に支那の空首布が主として支那の中原より出で、宋衛の物ならんと論せられてをることも一考すべきである。古代支那の貨幣として使用せられた貝貨が南方から輸入せられた様にこの南部、中部支那系統の有肩鍬型金屬器が古代支那の貨幣型として、河南方面の中原支那人に採用せられたと云ふことも想像出来る。もし此考察が幸ひに正しかつたならば徐氏の考へた如く支那に於ける貨幣の發達も、兩足布が發達して直接空首布になつた譯でなく、よし兩足布が古しとしてもそれは未の岐頭の農具の影響を受けて北

方に發達したものであり、空首布の方は之と反對に錢鏹の如き草きりの農具を眞似て南方、中原地帯に發達したもので、大體の形は兩足布を眞似たにしろ成立に於て別個の農具から影響を受けたものであつたのでは無いかと思ふ。

以上は考古學及び古錢の研究に對して從來門外漢であつた自分の初めての研究であり、さだめし粗漏な點が多いと思ふ。大方の御示教を得れば幸ひである。(註十三) 本論文の執筆に當り、圖書閱覽に東大人類學教室、本塾圖書館が多大の便宜を寄せられたことを感謝し、また加藤繁教授より布の變遷に就て重要な御教示を受けたこと、錢幣館主人田中謙氏が實物を教示せられ、福島順之助氏が挿繪を執筆され、八幡一郎氏大給尹氏西村捨也氏等より圖書閱覽寄贈其他の便宜を與えられたことを謹んで御禮申し上げる。なほ西湖博物館所藏品は昨年六月第一次訪問の際西岡秀雄氏のスケッチされたものを利用したのである。

(一) Sir A. P. Phayre, On stone weapons from Burma. Proc. of the Asiatic Soc. of Bengal, Bengal, 1876, 3.

(二) ハイネ氏はその有肩石斧に關する説を Georg Buschan, Illustrierte Völkerkunde, II, 中 Südostasien の中に纏めて書いて居る。また Die Steinzeit Südasiens. Sitzungsberichte der Anthr. Ges. Wien, Jahrg, 1926/1927 (Mit. d. Anthr. Ges. in Wien, LVII), 51—53.

Gibt es eine austrasiatische Rasse? (Archiv für Anthropologie, Neue Folge, XVIII, 1921, S.79—99).

(三) 此遺跡より出土した有肩石斧類の石器の模型一個はカレンフェルス氏より大山公に贈られ、史前學雜誌八卷三號一五三、一五四頁昭和十一年に池上啓介氏「カレンフェルス氏寄贈のマレイ半島の遺物」中に紹介され、その原物の寫眞は同雜誌

八卷五號池上氏の記事中に同報告より轉載されてゐる。

- (四) Matsumoto, *Le Japonais et les langues austroasiatiques*, Paris, 1928. P. W. Schmidt, *Die Beziehungen der Austrischen Sprachen zum Japanischen*. 民俗學二十號、及び *Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik I* (1930) 239—251, 前者に拙譯あり。
- (五) R. B. Dixon, *Recent archaeological discoveries in the Philippines and their being on the prehistory of Eastern Asia*, Proc. of the American Philosophical Soc, LXIX (1930) 225—229.
- (六) Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indie, *Oudheidkundig Verstag*, 1929, *Eerste en Tweede Kwartaal*, P. 29,
- (七) 水野清一氏「天津北疆博物院をのぞく」*考古學*七卷九號、四一頁に張家口外高家營子出土石器として有肩石斧のスケッチあり。なほ赤峯出土のものは江上、駒井兩氏の「東亞考古學」(世界歴史大系)四〇八頁に圖示されてゐる。
- (八) 香港の發掘に就ては拙稿「香港船遼洲の發掘に就て」(史學十七卷一號)、及び「史學」十二卷四號、十三卷一號所載餘白錄「民族學研究」二卷二號所載新刊紹介等を参照。
- (九) ハイネ氏の外にエチアン・パント氏は有肩石斧をスーザ出土の筥型石斧と比較した(E. Pate, *Résultats des Fouilles de la Grotte sépulcrale néolithique de Minh Cam* (*Bull. Serv. géol. de l'Indochine*, vol, XII, Fasc. 1, 19)°)。その下にネグリト族の遺品と推してゐる。また最近には *Quelques points de comparaison fournis par la Chine Protolithique*(*B. E. F. E. O. Tome XXXI*, 1931. Nos 1—2, 1931)の中に、有肩石斧と支那の玉戚との關係を推してゐる。ラウフェルも支那の戚系統の玉器と布及び有肩石斧との關係を論じてゐるが此問題はまた他の機會にて論ずることとする。またコラニ女史はその *Haches et bijoux* (*B. E. F. E. O. XXXV*, 1935, Fasc, 2, P. 348)中に印度支那出土有肩石斧をスーザ及びエクスアデル出土品と比較し世界に於ける有肩石斧分布圖を作成してゐる。また Montandon, *Traite d'Ethnologie culturelle*, Paris, 1934. P. 479にもハイネの圖が利用されてゐる。

有肩石斧の諸問題(松本)

(五三)

三二七

(十) 印度支那の石器をインドネシアやポリネシアのものと比較し、その類似せることを指摘した人にハイネ氏に先立ち H. Hupert 氏が在る。Premier Congrès internationale des Etudes d'Extrême-Orient, Hanoi (1902) P. 43—44 (Hanoi, 1903) (本書は横智雄氏の好意により手に入れることを得た。記して謝意を表す)。氏は此相似を同一なる民族集團の分布と關係あると云つてをる。

(十一) F. S. Forbes, Comparative Grammar of the Languages of Further India, P. 142 (London, 1881)

(十二) 黒田幹一氏「周代の金屬貨幣に就きて」(考古學雜誌十六卷三號)は河南鄭州附近出土の銅銚の寫眞を掲げてをる。之は全長六寸刃部の幅三寸厚一分二厘重さ九十匁七である云ふ。著者の意見も布は農具錢の變形だと云ふ説であるが「貨幣」百三十二號向陵生遺稿に掲げられた瀨尾向陵氏の意見では此説を排し、布とは罇の事であり、錢即ち銚は草を剝除する器物である故此器の如く狹長では不便であると云つてをる。

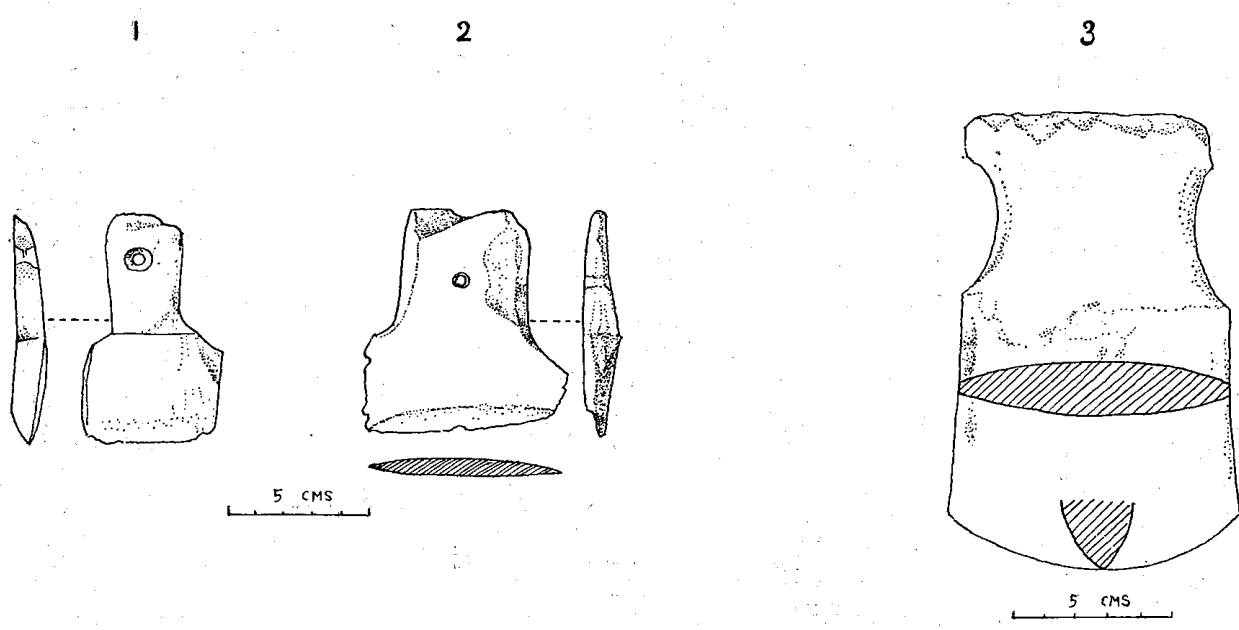
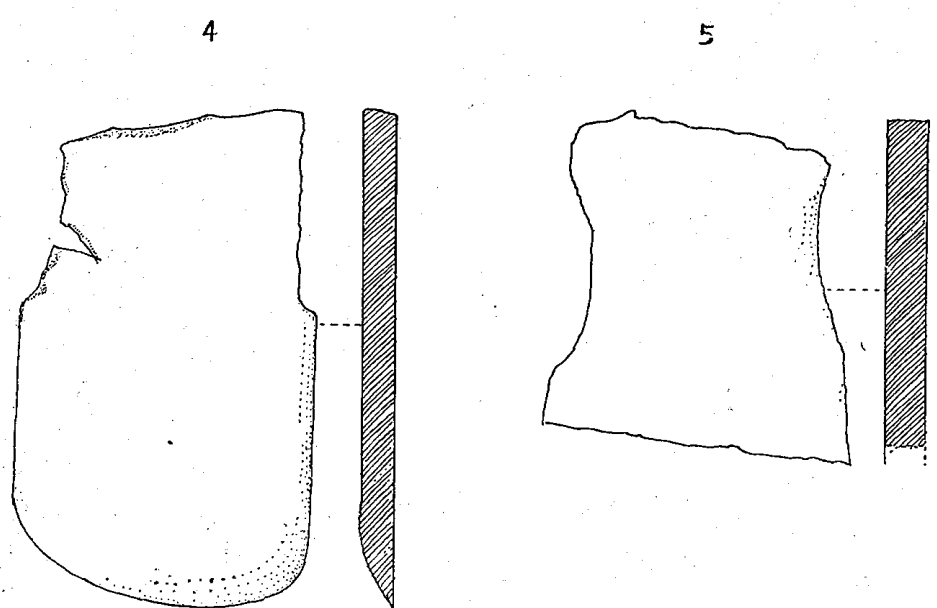
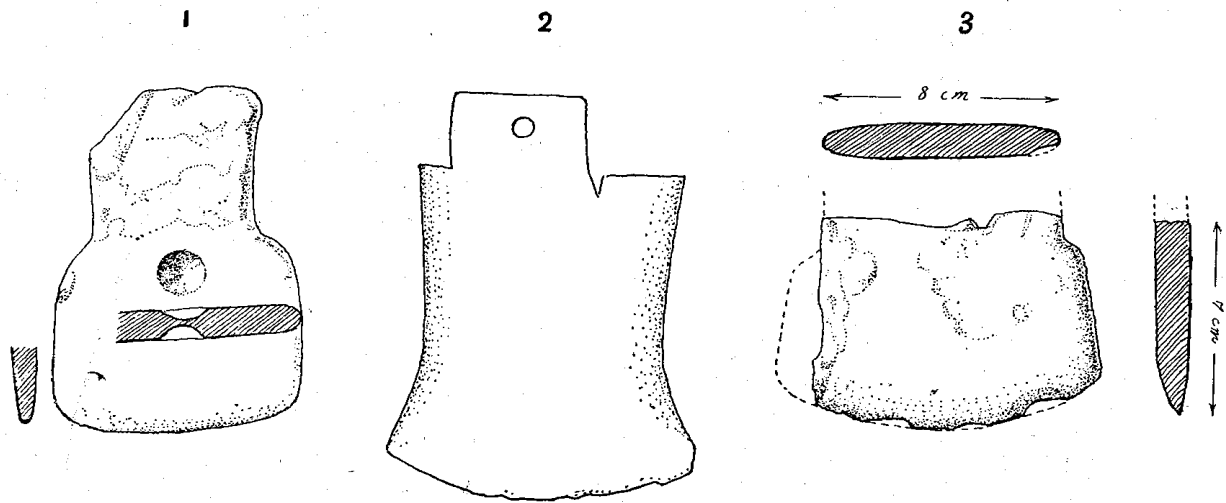
(十三) 印度支那の有肩石斧に就ては大山公は史前學雜誌一卷一號八九頁に「Laos 發見新石時代の有肩石斧」として R. Heine-Geldern, Gibt es eine austrasiatische Rasse? Archiv für Anthropologie XVIII, S. 95 よりとつた寫眞を轉載され、同一卷三號に「カンボチアの有肩石斧」として Mortillet, Musée Préhistorique Pl. LIV, p. 580 よりとつた圖を示されてをる。昭和八年予の望月基金による印度支那旅行の折ユラニ女史その他に請ふて印度支那出土石斧の標本を齎し歸り、之を大山史前學研究所に寄贈した。その中に有肩石斧二個あり、その寫眞は岩波講座「東洋思潮」拙稿「印度支那の文化」(上)中に掲げておいた。アグノーエル氏は日佛會館に印度支那の先史考古學的文献資料を集めたが、大山史前學研究所に於て印度支那の先史考古學に就て連續講演をなし、その講演筆記の一部が「史前學雜誌」三卷四・五號、四卷三・四號に發表されてをる。なほ同地考古學的研究の概括的敘述に就ては拙稿「印度支那の文化」上、及び「考古學雜誌」廿七卷十二號所載拙稿「上代印度支那の考古學的研究に就て」参照。

第三圖 有肩石斧

3. 熱河朝陽縣宋家營子採集（八幡氏原圖）
2. 河南省安陽殷虛出土、骨製（李濟氏原圖）
1. 熱河綏東出土（水野氏原圖）
8. 薩摩國川邊郡知覽村西別府（三森氏原圖）
7. 越前坂井郡井伊村東十鄉出土（小林氏原圖）
6. 大和唐古出土（小林氏原圖）
- 4.5. 山東城子崖出土

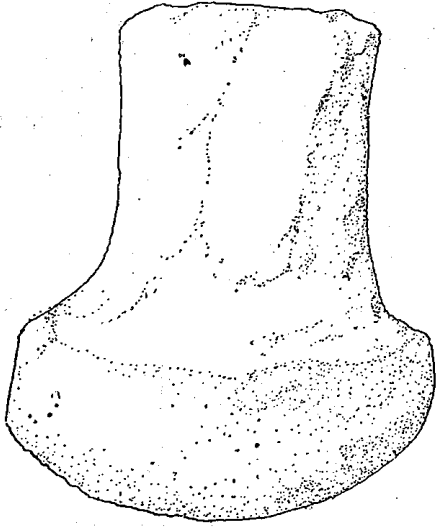
第四圖 有肩石斧

- 2.3. 湖州錢山漾出土
1. 杭州古蕩出土
- 4.5. 杭縣良渚鎮出土

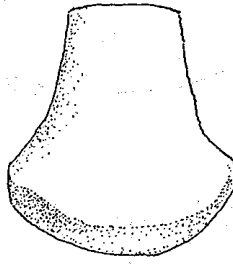


第 三 圖

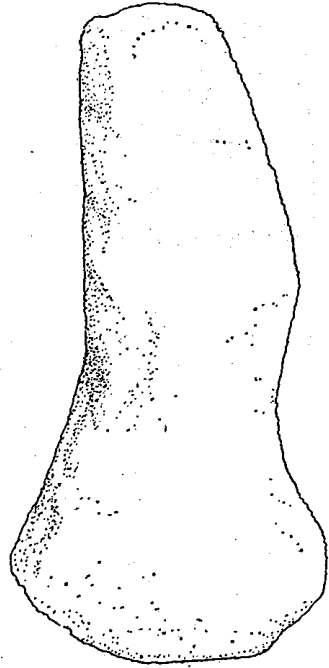
1



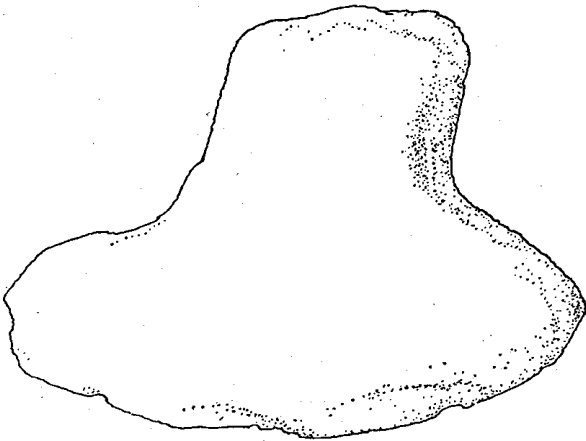
2



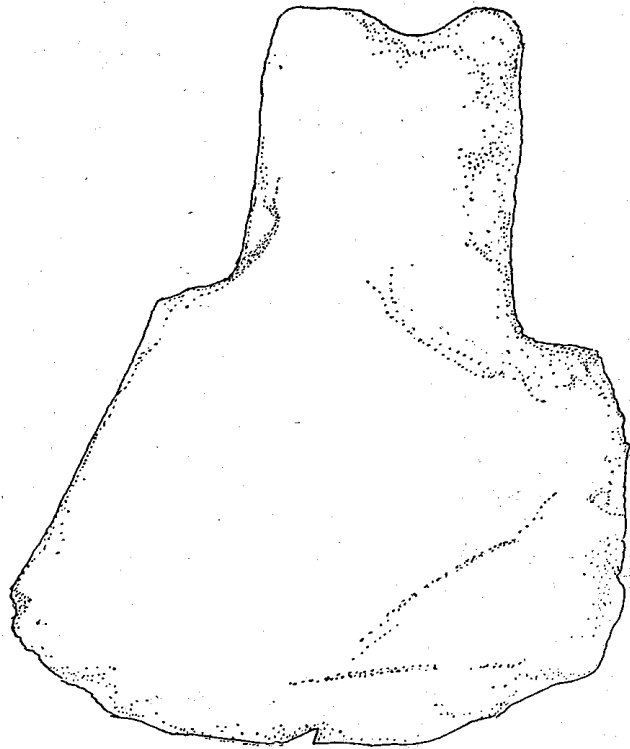
3



4



5



第 四 圖

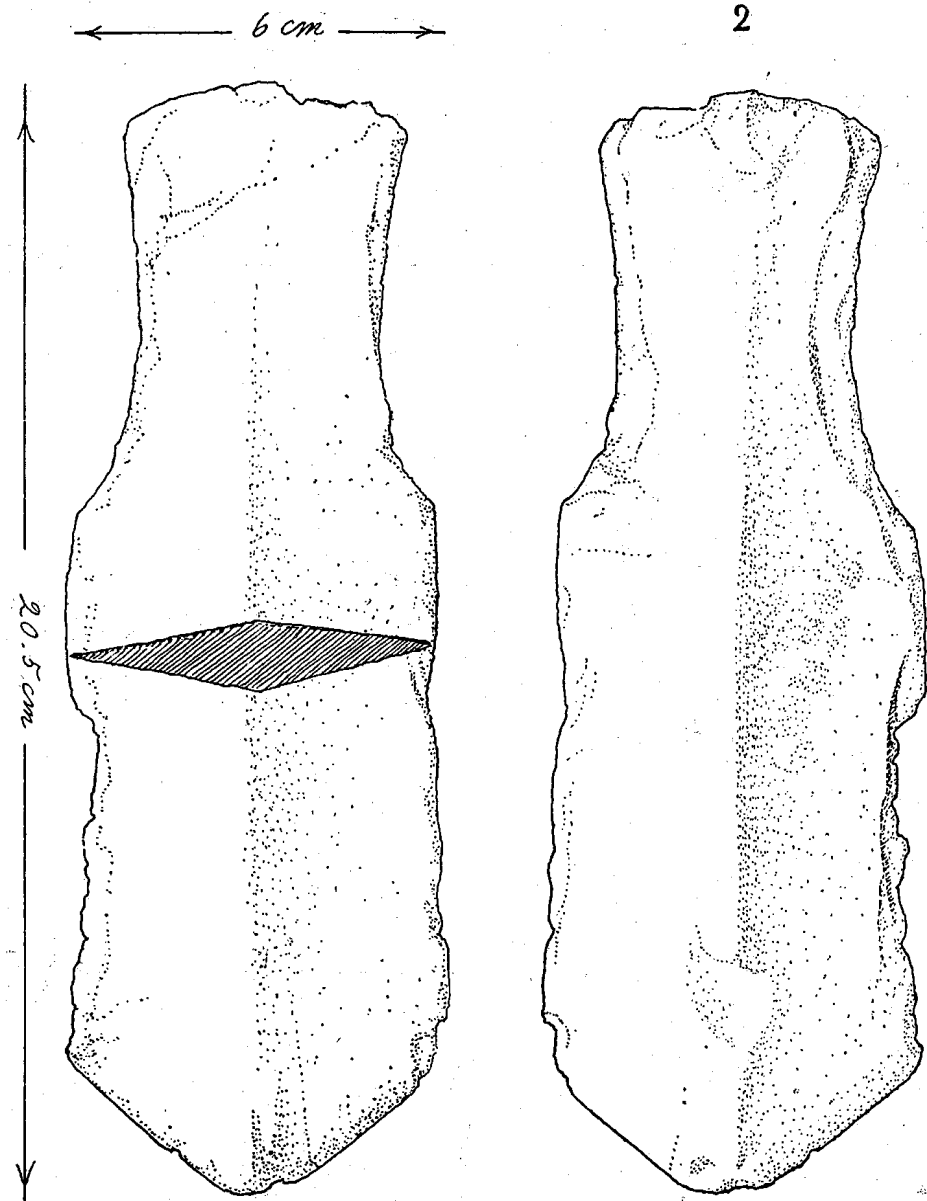
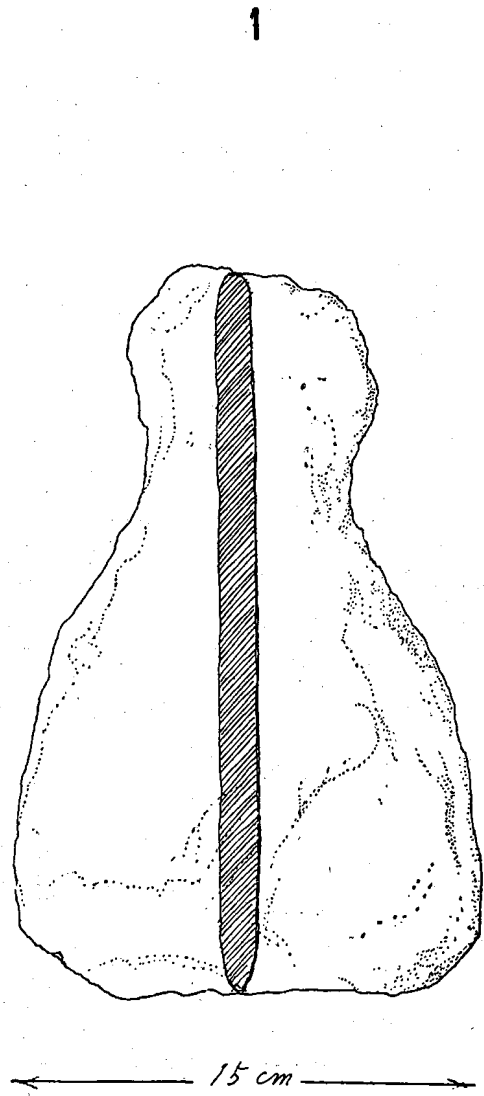
第五圖 有肩石器

1.2. 西湖博物館藏品

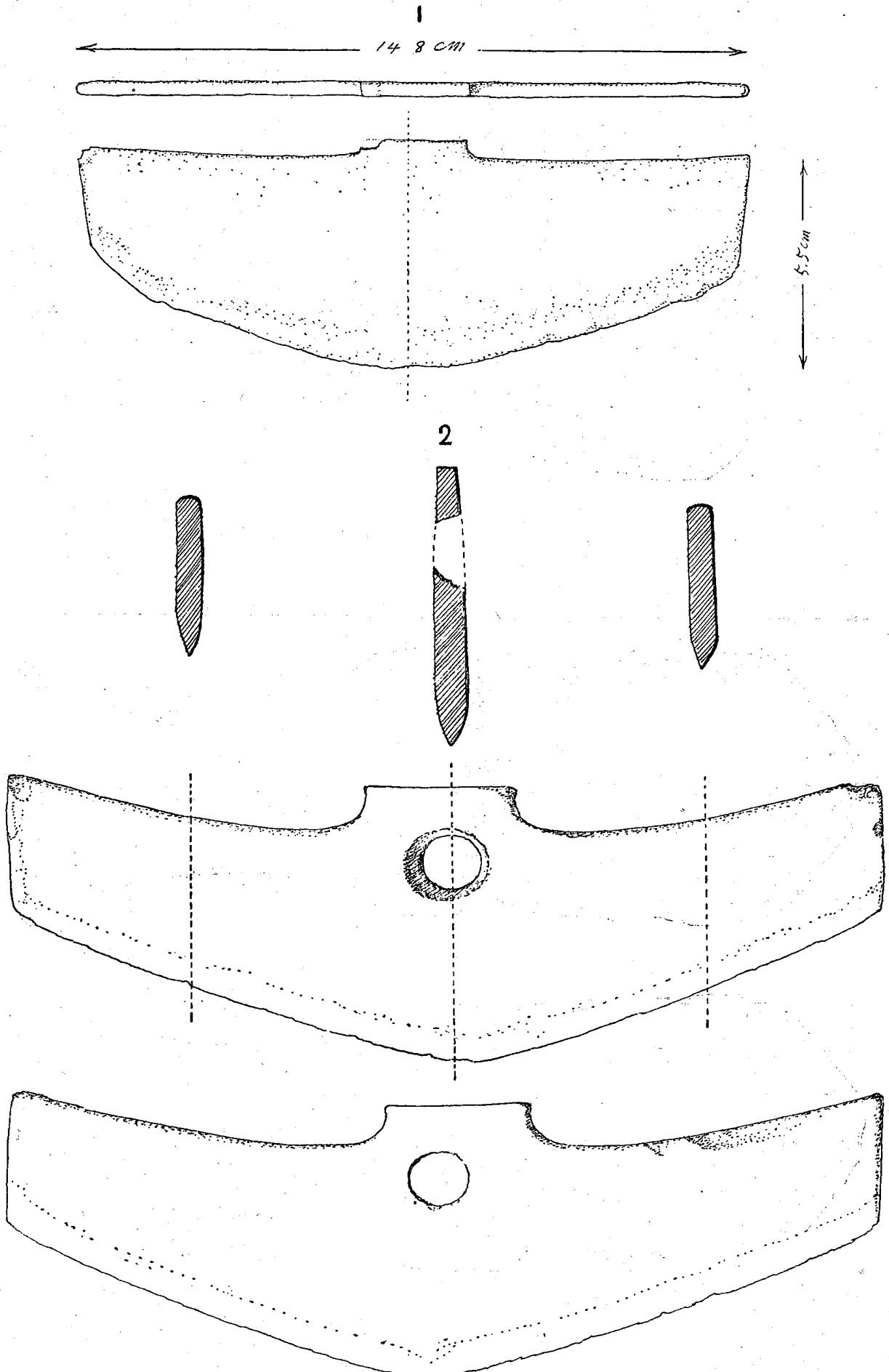
第六圖 特種有肩石斧

2. 杭州購入品

1. 西湖博物館藏品



第 五 圖



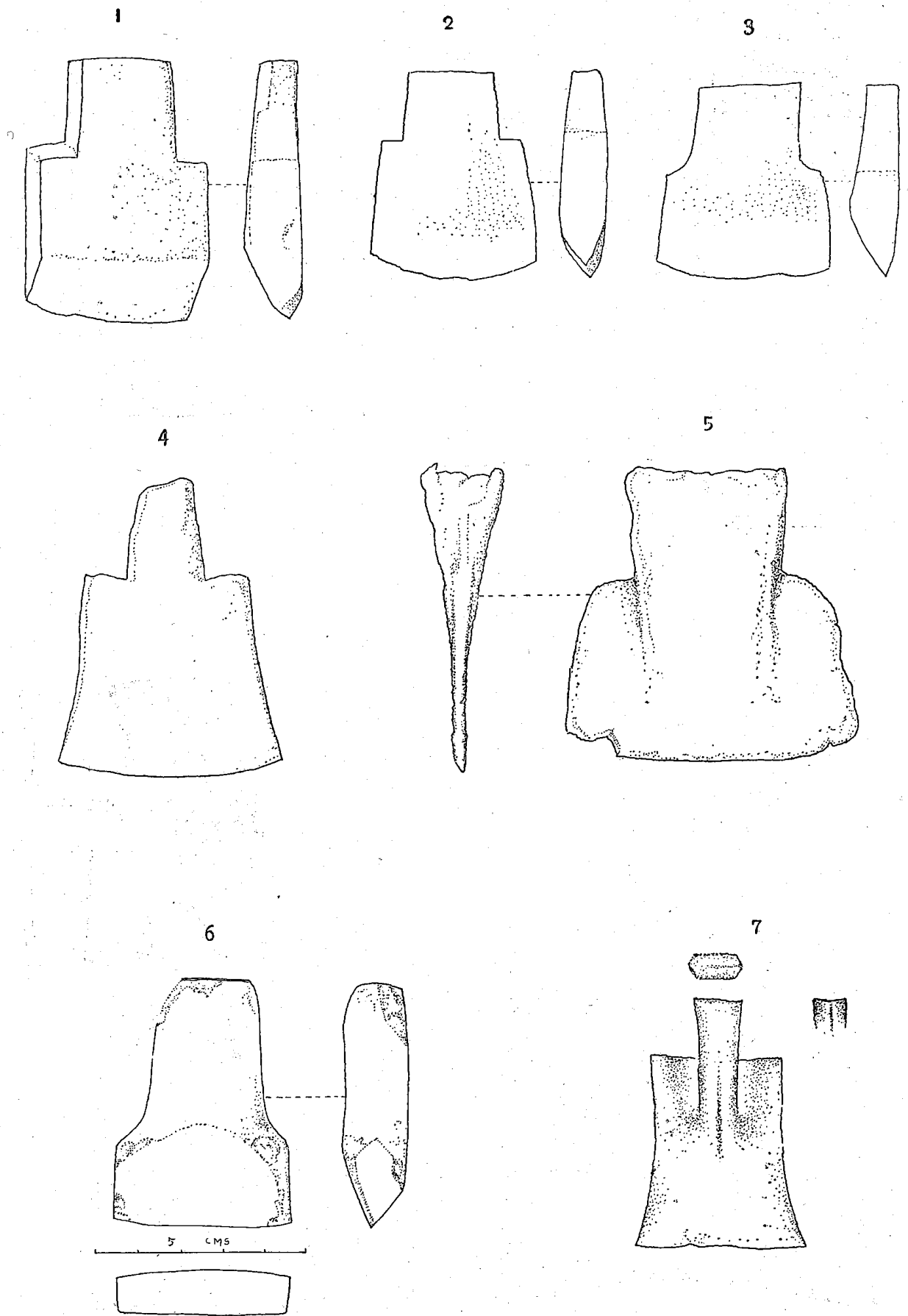
第 六 圖

第八圖

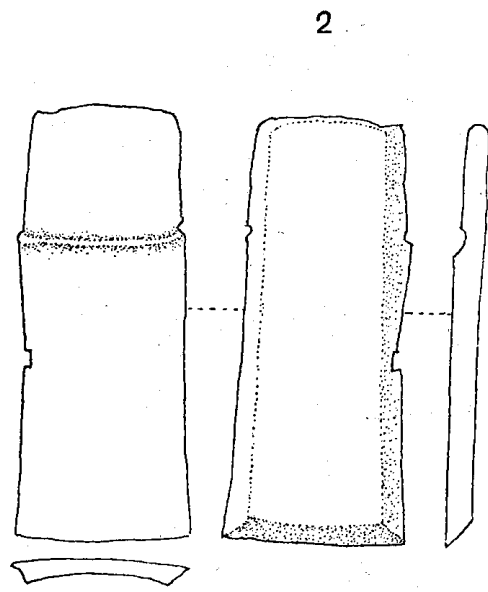
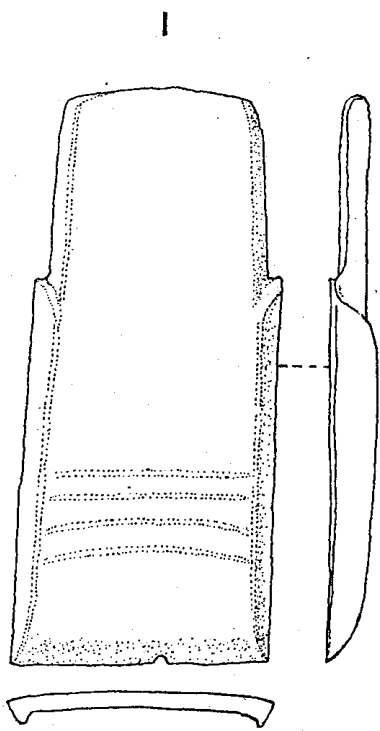
- 2.3. ビルマ出土有肩石斧
5. 所謂「錢」——鐵製鍬
7. 所謂「鑄幣」
1. 印度チヨタナグプール出土有肩石斧
4. カンボデア出土有肩石斧
6. 香港船遼洲出土有肩石斧

第九圖

- 1.2. 香港船遼洲出土青銅斧
3. 空首布
4. 兩足布

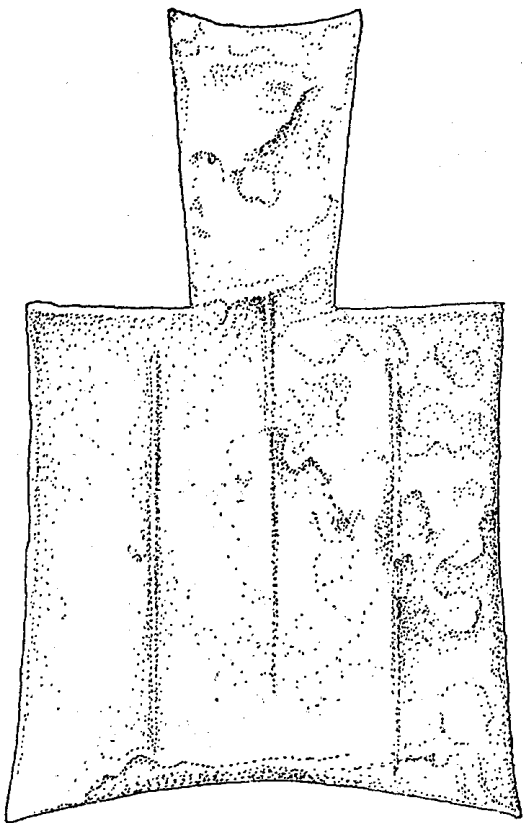


第 八 圖

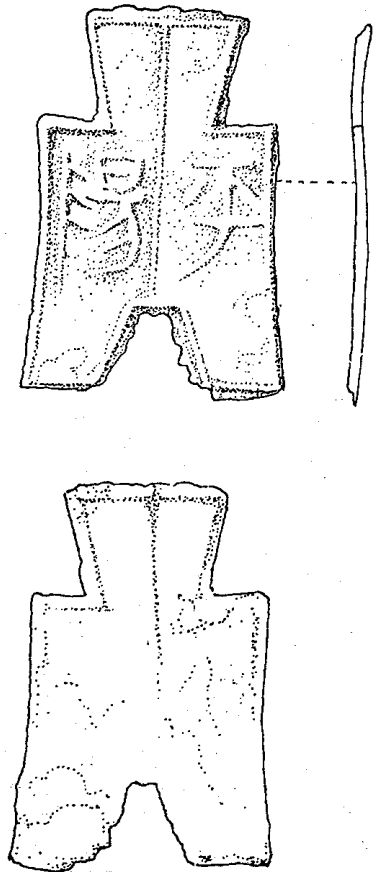


5 CMS

3



4



第九圖